

**【霜を履(ふ)んで堅氷(けんぴょう)至る】**

「堅い氷の張る寒い冬は、いきなりやって来るのでは決してない。その前に、霜の降りる朝が何日か必ずあって、それから後にやって来るものである。だから、霜の日のうちに堅い氷の張る寒い日の備えをしておくことが必要である」という意味の言葉で、易経に見える言葉です。

この言葉は、「人殺しでも平然とやれるような大悪人も、初めからそういう大悪人であることはない。初めは、平気で嘘をつくとか意地悪をすとか、小さな悪事をしていたものが、次第にエスカレートして大悪事をするようになるのである。だから、小さな悪事のうちに注意して、悪を絶ち切る必要がある」という事を教えているとも考えられ、また、「死に至るような大病も、初めからそういう難病であったのではなく、少し注意すれば容易に治るはずの病気が、油断のために悪化して死病に至るのである。だから、軽症のうちに手当てすることが大切である」という事を教えているとも考えられます。

さて、“履”という字は、尸と復とで作られています。尸は、俗に“しかばね”と呼ばれていますが、人が椅子に腰かけた形を象った字で、“人”を表わしたものです。これと“死”との合字である“屍”が“死んだ人”つまり、“しかばね”を表わしているため、尸が“しかばね”と呼ば

れるようになったものです。

尸のついた字に“屎・尿”があります。人体から出る“米”や“水”を表わした字で、糞(米の変化したものという意味の字)や小水を表わした字です。“屋”という字は、“人の至る所”という意味の字で、“室”と同じく“人の休む所”つまり“家”を表わした字です。“家屋”という熟語がよくこれを表わしています。

尾は、昔、人が鳥獣のしっぽのように後ろに毛の飾りを垂らしていて、これを“尾”と言いましたが、鳥獣のしっぽそのものを、“尾”と言うようになりました。また、昔は家の出入口が低く小さくなっていたので、出る時は体がかがめなければなりません。それで“人が出る”という“屈”が、“かがむ”という意味を表わしています。

“复”は物の重なる事を表わした字で、内臓(腸)の重なった所の“腹”、布の重なった衣服(裏地のある)を表わした“複”、同じ道を重ねて通ることを表わした“復”などがあります。裏地のない衣服を“単衣(ひとえ)”と言い、裏地のあるのを“複(あわせ)”ということから、単をシングル、複をダブルの意味に使うようになりました。

復は、同じ道に行く意味の字ですから、往復というように、同じ道を通って“かえる”のに使います。“還”はぐるっと回って“かえる”ことです。さて、“履”は、“人が道を重ねて行く”意味で、“足でふむ”という意味を表わしたものです。